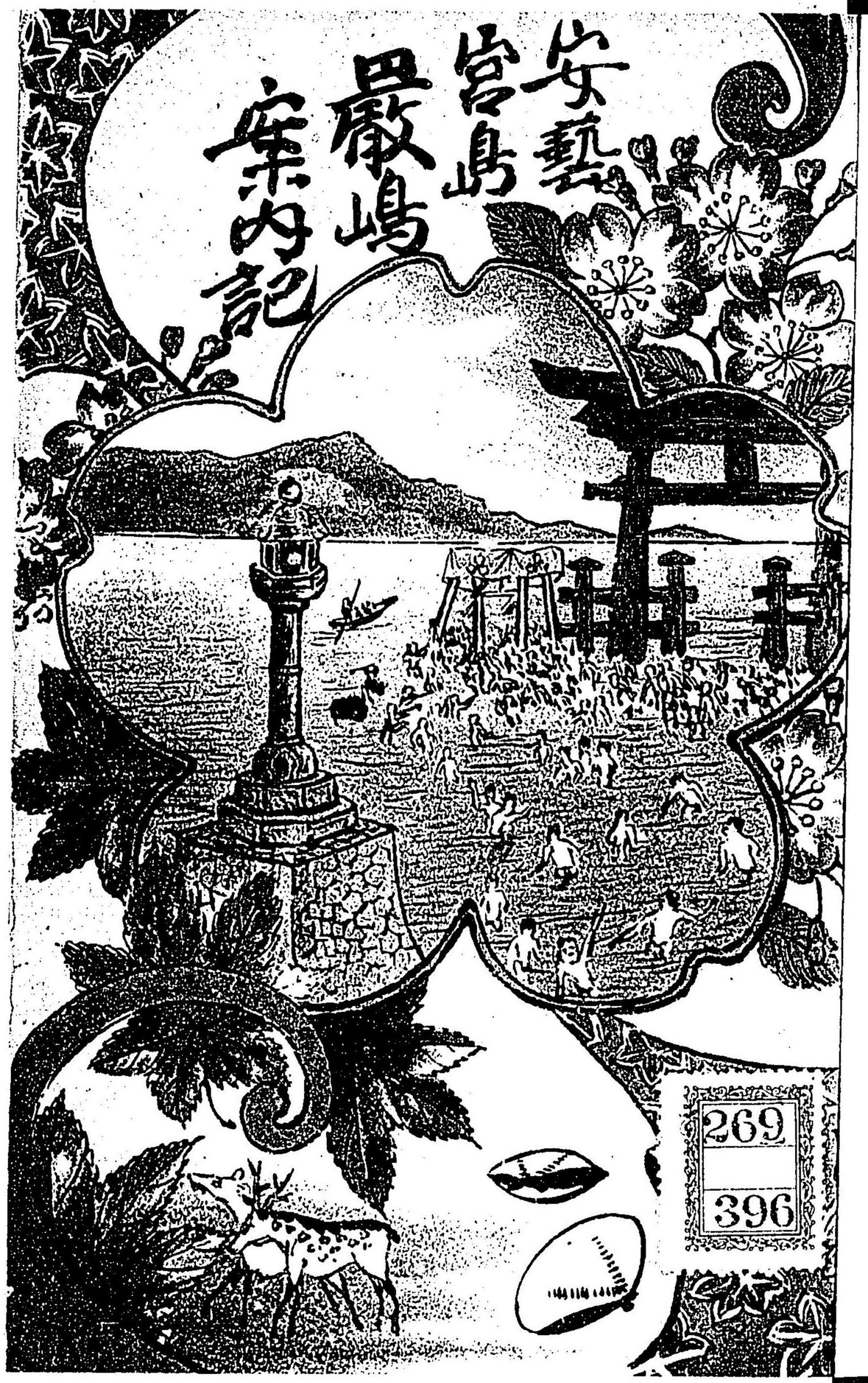
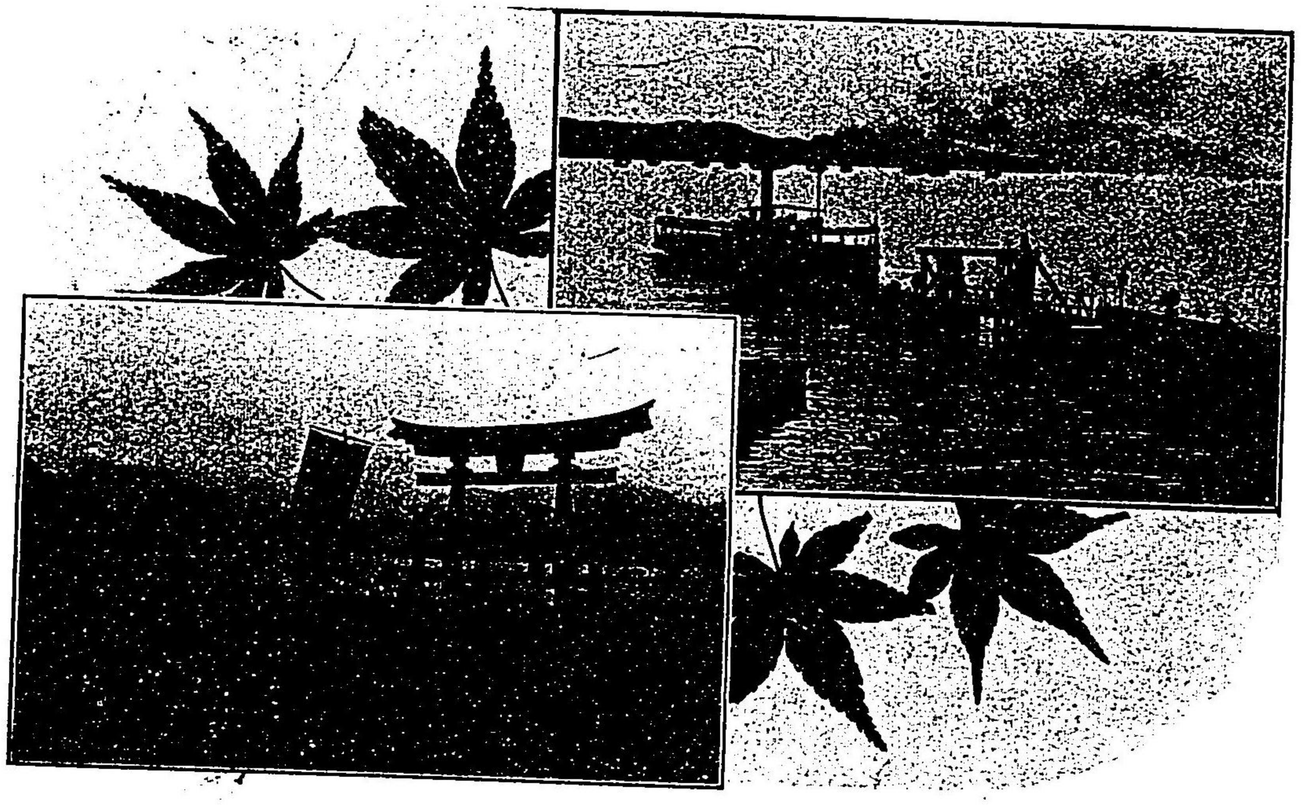


269
396

安藝宮島

いつまでもみるめはかれし嚴島
めぐる浦回を面かげにして　似雲



遠島の下つ岩根の宮ばしら
波の上より立つかとぞ見る　玄旨法師

大鳥居及松原ノ勝景
Otorii and Matsubara.

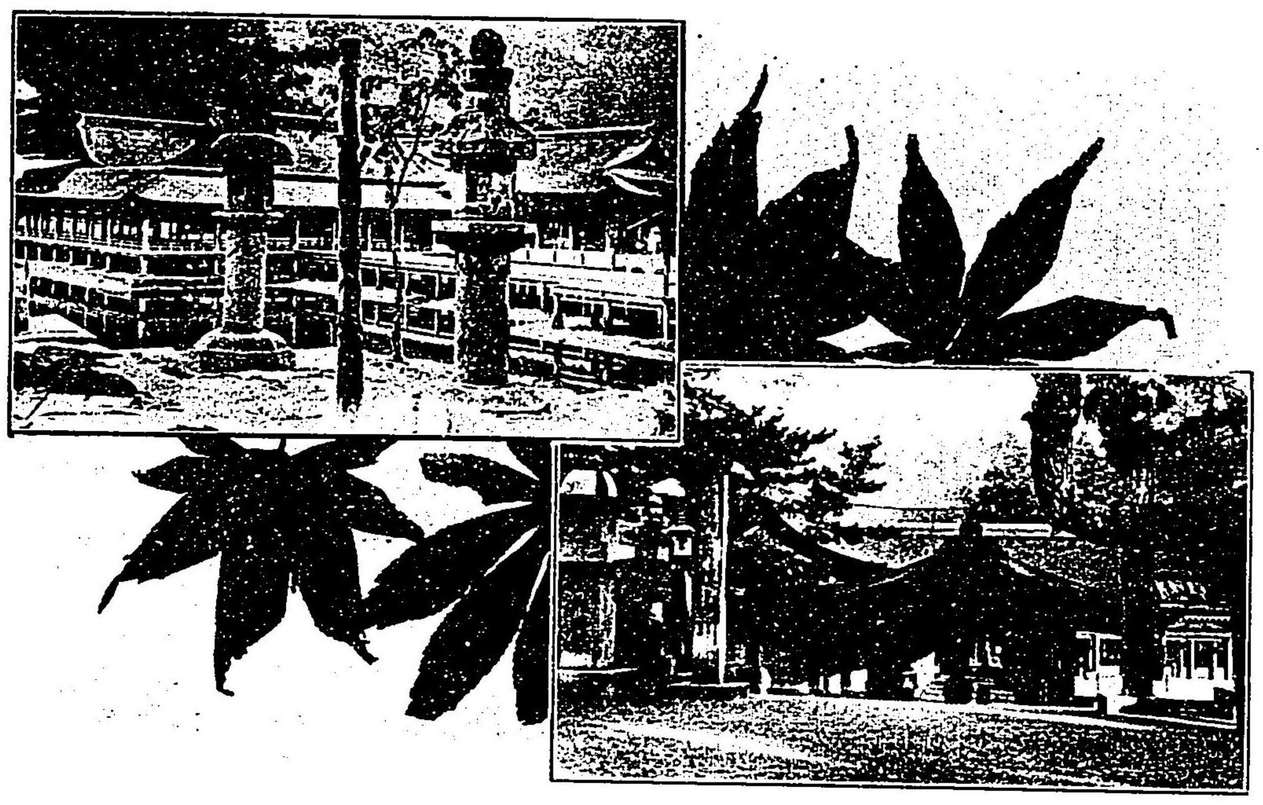
宮島橋桟
Sanbashi, Miyajima.

毎20
353

安藝宮島

やはらぐる光りも高き宮島の
神にあゆみをはこぶ諸人

中納言持豊



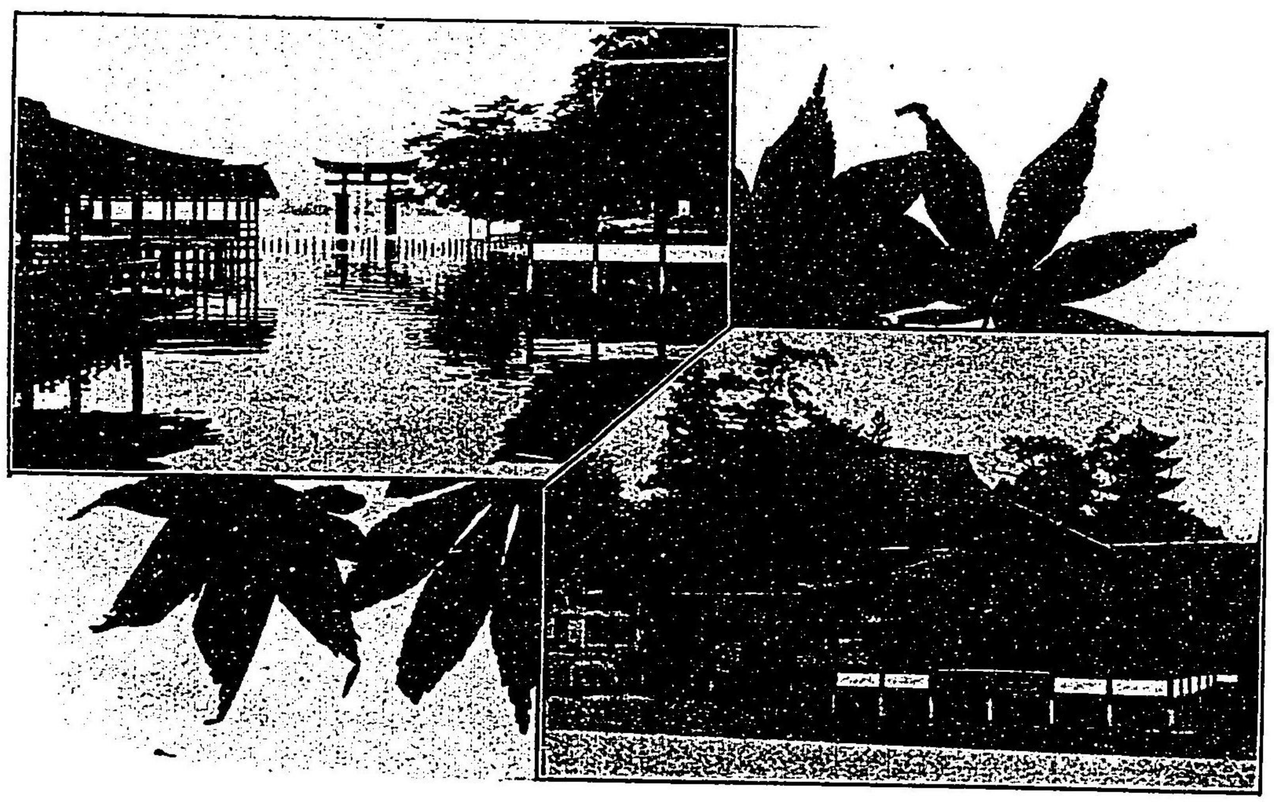
みつ汐の半ひたせる神のつや
龍の都にたちつゞくらむ

大覺寺法親王

曾我兄弟燈籠及御本社側面
The stone lamps in Commemoration of Soga Brother.

嚴島神社御本社入口
The Gate of the Itsukushima Shrine.

安藝宮島



さす潮も光たゝへて島の名の
宮居すゞしき夏の夜の月

似雲法師

汐見ては波にうつるも數を見る
此みやしまの宮のともし火

正二位通躬

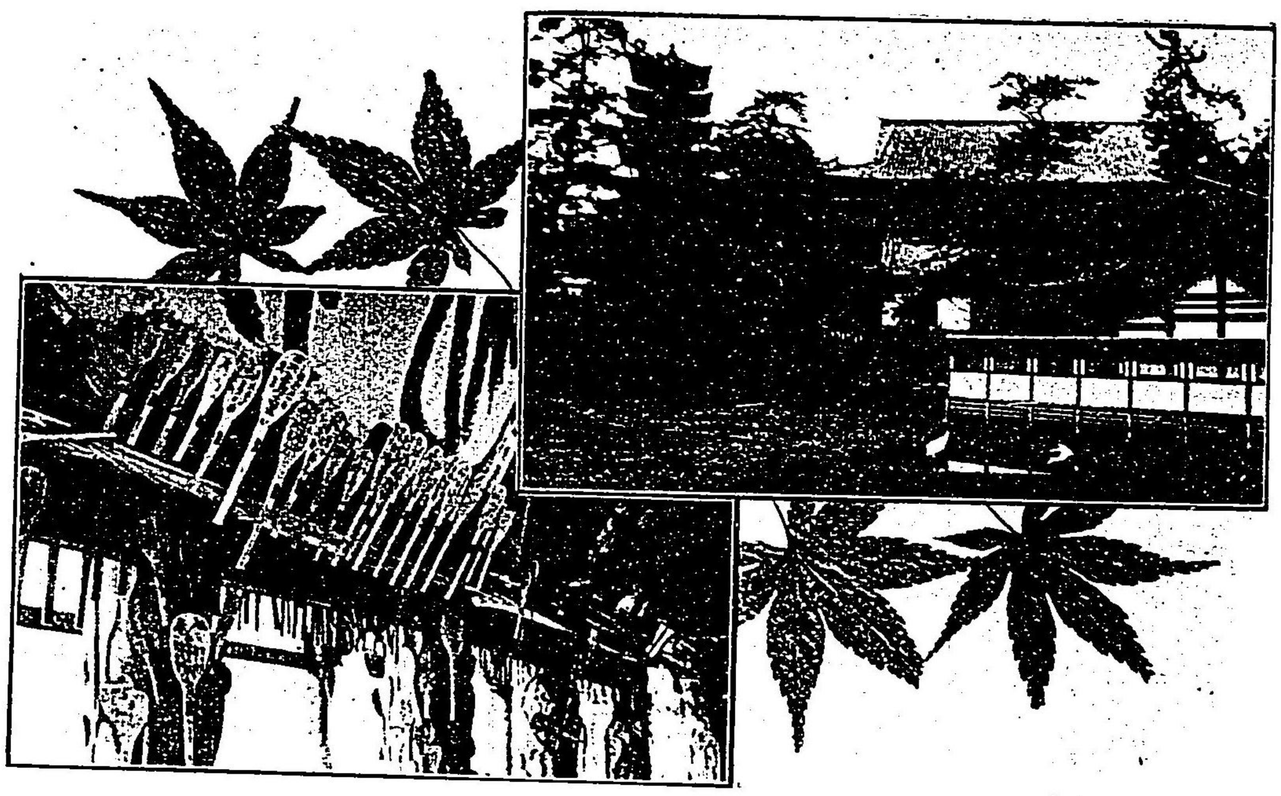
客人社（正面）
The corridor of the Shrine.

廻廊ヨリ大鳥居ヲ望ム
The passage at high-tide.

安藝宮島

みやしろにかくる光も盆なき
かゞみの池にすめる月影

宣阿



またこんと誰にもえこそいひなかじ
心にかなふいのちならねば

塙團右衛門直之

千疊閣めし取り杓子
Senjokaku.

塔重五閣疊千及鏡の池の鏡
Kagami-no-Ike.

安藝宮島

滿つ汐の波のよる〳〵灯の
影も靜づけき神の宮居に

佐伯文寛

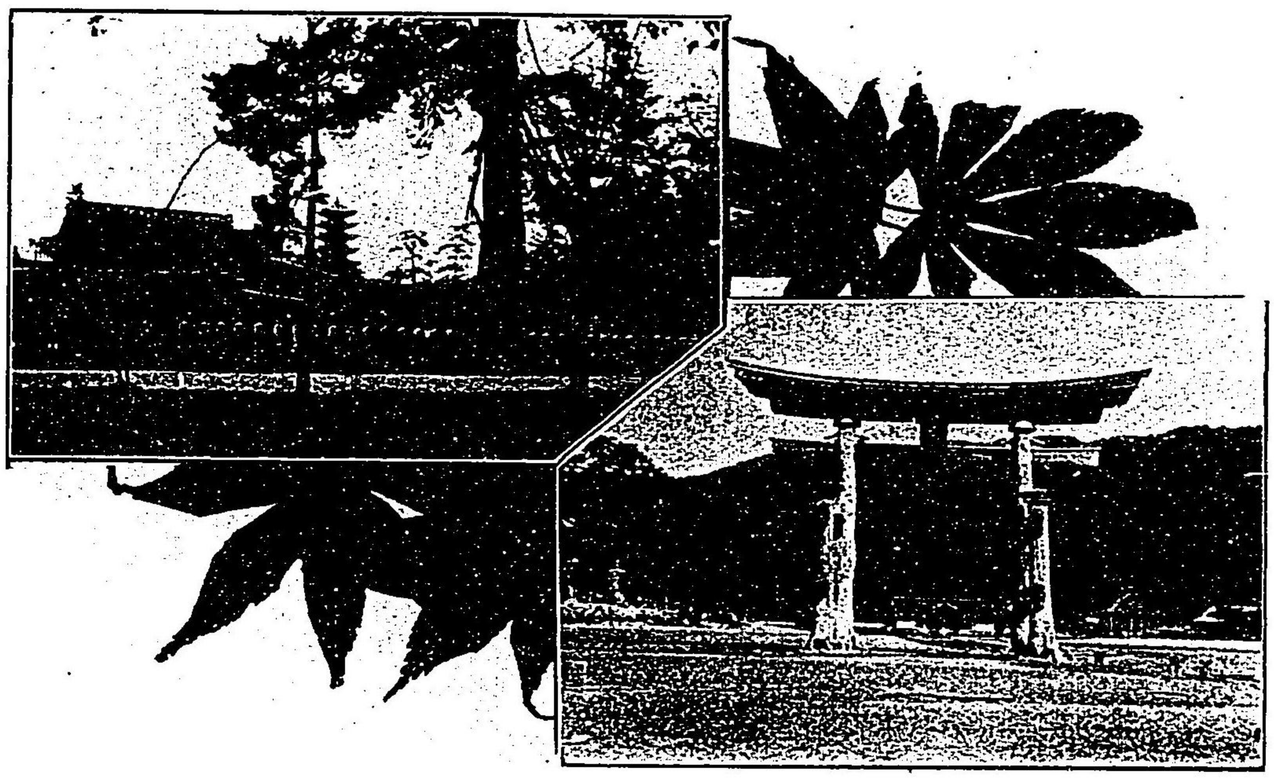
名も高き宮居はるかに來て見れば
かすみのすえのおきつ白波

太一坊

延年祭玉取
Ennensai

厳島神社側面ト客人社
Itsukushima Temple.

安藝宮島



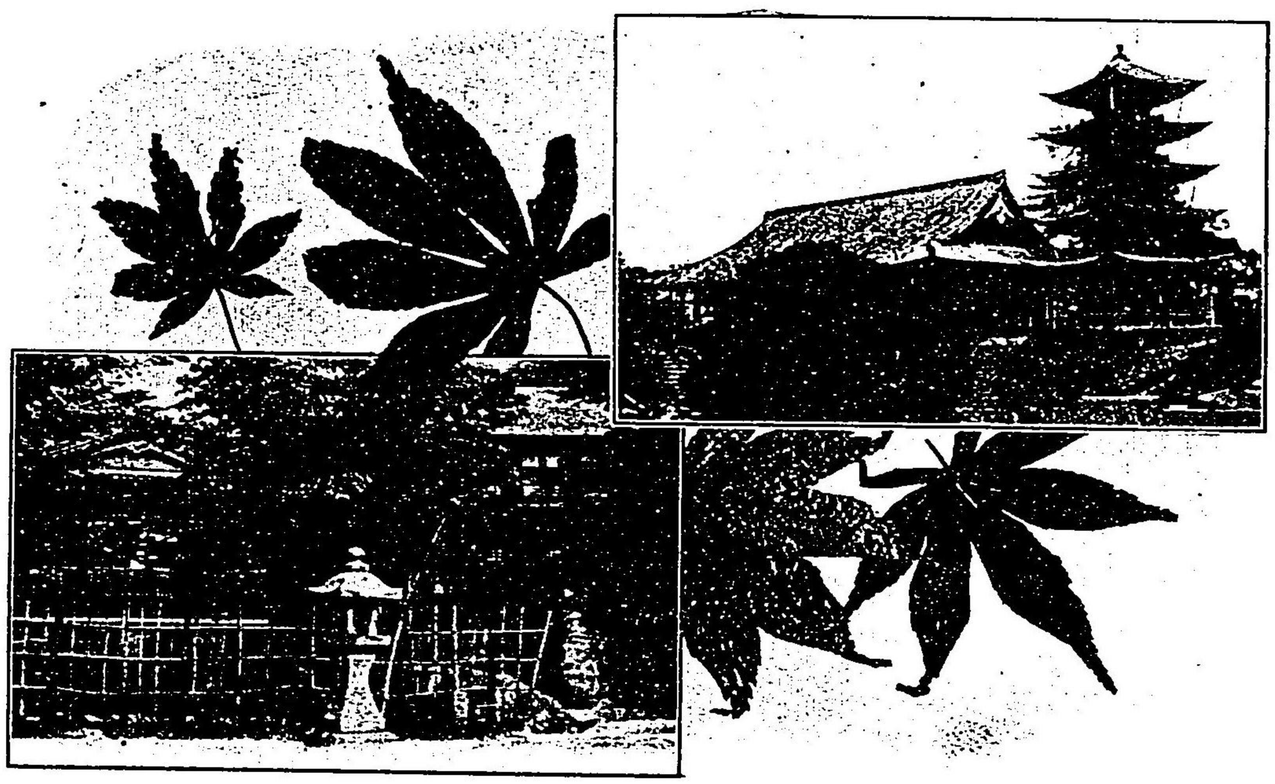
これてたる秋のすがたや大鳥居　蒼虹

輪二ッにはりしばかりの橋の上
おなじ影見る弓張の月　頼杏坪

反橋ヨリ千疊閣及五重塔ヲ望ム
The Senjokaku and Gojuto from Soribashi.

大鳥居正面ヨリ御本社ヲ望ム
The Otorii from the Itsukushima Shrine.

安藝宮島



大元や拜むも見るもはつざくら　風律

またこんと誰にもえこそいひかじ
心にかなふいのちならねば　培直之

千疊閣及五重塔
Senjokaku Hall and Five storied Pagoda.

大元公園宮島ホテルノ景
Miyajima-Hotel in the Omoto park.

安藝宮島

いつきひめ秋のすさみにおりいだす
もみぢのにしきたゞむ山のは

従一位資枝

秋山にそめし心のみやびかも
とりてぞしのぶ紅葉々の色

本居大平

紅葉谷公園（一其）
No. 1. The Momijidani Park.

（二其）　仝
No. 2. The Momijidani Park.

安藝宮島名勝案内記

安藝の嚴島――其の土地の廣さを以ていへば蕞爾たる一小島で、全島を圍つた處で里數僅に七里、其の京街は翠巒高峰の北麓に沿へる極めて狹隘な海濱の一小區、東西の長さ十町南北の幅さ二町に過ぎぬのである、されど此一小島嶼――安藝の嚴島はその實質に於て左樣に小さく且狹いものではないのである、嚴島が日本三景の隨一としての稱讃は最早過去の歷史を飾るの辭に過ぎぬので、今日では日本形勝の白眉、否世界の公園とし唄はれて內外人の共に賞愛して措かぬのであつて、島は大ならずとも土地は廣からずとも其の聲譽に於ては世界的のものとなつたのである、而も此優越せる勝地の實質に就ての品隲はこゝに叙說するを要せない、本書は直に筆を此世界的公園地の案內に進め、觀光遊覽の旅客が本島を窺ふに當り東道の主人公たらんことを冀ふのである。

嚴島に渡るに鐵道に依るものは鐵道院山陽線宮島驛で下車する、驛を出たまゝ眞向に歩むと二町餘で棧橋に下りたてばこゝには新式の汽船（嚴島丸）

45. 6. 13

が海陸の連絡を取るべく煙を吐いてをる、此汽船に乗るが早いか汽笛一聲白波を蹴揚げ、山容水態應接に遑もあらばこそ十分時ならぬに船は嚴島棧橋に着くのである、又海路汽船に據るものは港の中心に停船し通船に出迎はれて海岸に送られるのである。

こゝには參詣遊覽の順路から記さんに、棧橋より待合所を出づれば小浦町を左側に見ながら西に進む、其の初手は濱の町とて海岸に沿へるが之を曲りて商家簷を連ねし街衢に出づ此通りを海岸通りといふのである、嚴島郵便局を左手に見る電信は勿論長距離電話も取扱ふて居る、それより約二町が程に嚴島警察分署がある（右手海岸に沿ふ）程なく市場を離れ嚴然たる石の連注柱があるこれからが神地となるので傍らに案内者の詰所がある、案内は區域を定めて料金に多少の差あり（附錄參看）神地を入ると石の大鳥居がある嚴島は大鳥居を以て名を知られて居るが、海上にあるものゝ外この石の大鳥居も恐らく日本一であらう、此石大鳥居は高さ三丈九尺五寸柱の周圍一丈三尺笠木の長さ四丈二尺で額は太政大臣三條實美公の筆に成り製作は一切舊來の大鳥居のものに倣ふてある、此建設計畫は明治初年に於て出來たのであるが、其の落成を告げ

たのは明治三十八年四月のことで北海道後志國古宇郡泊村の本社崇敬者田中福松といふ人が少なからぬ献金をした爲に斯くは一偉觀を留め得たのである此邊りを御笠濱といつて嚴島八景の一である、左を仰げば千疊閣堂々と聳え右手は碧水を距てゝ宮島驛呼べば應へん風情あり、行く手には海上近く彼の有名なる大鳥居が潮水に泛んで其の笠木は天に朝し柱脚は龍宮を壓するの概がある、間もなく御本社廻廊東の入口に達す、其の傍らに御厩を見ながら廻廊に進む、先づ左手に一祠あり之が

客神社　で正哉吾勝々速日天忍穗耳命、天穗日命、天津彦根命、活津彦根命、熊野樟日命の五座を祭る、建物は本殿、大床、幣殿、拜殿、稄殿に區分され後に海水を隔てゝ瑞籬を廻らす。

嚴島神社　祭神は市杵島姫命、田心姫命、湍津姫命にて相殿に國常立尊、天照皇大神及び素盞嗚尊を祀る、こゝに本社鎮座の緣起を掲ぐれば左の通りである。

抑も人皇三十四代、推古天皇の元年癸丑佐伯郡の人佐伯鞍職、所の翁と共に海上に釣りしてありしに紅の帆を揚げて西より來る船あるを見る、漸く

近づけば船中に三女神あり舳に嚴鉾、赤幣を立て嚴瓶を置く、女神鞍職を見て宣はく吾は古へより此島に在りて幽事を治め百王を鎭護せり、汝朝廷に奏して祠殿を造建すべしと、鞍職之を畏みて京師に上り神託を奏して勅許を拜し島に歸りて造營すべき社地を定めんものと、新たなる船を作り所の翁と共に島々浦々を見巡ぐれる時しも神鴉山上より來りて船の導きを爲し終に御笠濱に止まる、二人依つて神意の命ずる所なるを知り大岩小石を打均し齋斧を以て樹木を切取り高天原に千木高く新宮を造立てたるなり、或は曰く初め三柱の神の此島に鎭座ありしは人皇十一代、垂仁天皇の御宇にして山嶺の東南にある御山神社此蹟跡なりと云へり、斯くて創建の後朝廷より屢々修理を加へ祭式も嚴かに擧げさせられける山傳へあり尤も天文十五年當社神主源廣敎佐伯郡櫻尾城主たりしに際し大内義隆に攻滅ばされ蒲記多くは兵火に罹りて燼亡したれば確に其の詳しきを知る事能はざれど延喜式神名帳に安藝國佐伯郡伊都伎島神社とあり又三代實錄に當社贈位の事見えたれば其の頃御祭式の事も鄭重なりしを推知せらるゝなり平清盛安藝守たりし時厚くこの神を崇敬しその太政大臣たるに及びて益々尊

信し神領を增し社殿を營み攝社、末社、廻廊、華表に至るまで大に修理を加へ壯觀を增したり、斯くて承安四年甲午後白河法皇行幸あらせられ治承四年庚子高倉上皇亦臨幸ありて金銀の幣帛を捧げ給ひぬ、降りて源氏足利氏信奉し仁安元年祠官佐伯景弘は私費を投じて神殿を改め造り其の他當國の領主大内、毛利、福島、淺野の諸家とも社領を寄進し絶えず修理あり殊に豊臣秀吉朝鮮を征し九州名古屋に赴くに當り本島に兵船を寄せて篤く戰勝を祈願せし事あり、王政維新に際し更めて勅願所と定められ尋で明治四年神佛兩部の混淆を分けられしため別當供僧を廢し國幣中社に列せらる。

又此御本社建物の概要は左の通りである。

本殿（祭神鎭座の正殿を云ふ）梁行六間三尺六寸桁行十三間二尺二寸大床（正殿の周圍を云ふ四方の椽幅五尺）幣殿（正殿の前にあり）梁行三間一尺五寸桁行三間一尺八寸拜殿（幣殿の前にあり三棟より成る）梁行六間桁行七間四尺四寸祓殿（拜殿の前を云ふ）梁行六間四尺八寸桁行十三間三尺八寸

其他祓殿の前方に高舞臺がある、高舞臺を挾みて両脇に板敷あり廣さ百八十六坪臺下の支柱は悉く赤間石でこゝを平舞臺とす、平舞臺の左右に開くる所

各一構があるが之は樂房である、又平舞臺に聯續して中央海中に突出た鼻に一臺の金燈があるこゝが有名の火燒前（俗にお舌）で遙に海中の大鳥居と相對して居る、火燒前の左右樂房に接近して門客人社がある豐石窓の神、櫛石窓神を祭る俗にこれを沖の惠美須といつて居る、こゝより拜殿の左に進み大國神社、天神社があるその側より渡せる板橋を長橋といふ、更に廻廊を進むと半圓形の橋がある太皷橋（一名反り橋）といつて巾二間半長さ十一間三尺、更に右に行くと能舞臺に通ず能舞臺は三間四方で能樂を行ふ時には前方の海上に棧敷を架設して觀覽場とするのである、廻廊を西に渡り盡すと小川を距てゝ松原を望みながら橋を越せば山門高く聳えて

大願寺　境内となる、此寺は別號を龜居山放光院といひ眞言宗大覺寺末で本尊は藥師如來坐像（空海の作と傳ふ）脇立は釋迦如來（行基の作）阿難尊者、迦葉尊者にて共に國寶と治定されてある、延曆二十一年の創立で初めは天台宗であつたのを弘法大師が當島に修法した際眞言に改宗した、維新以前までは本社の修理造營一切の事を掌監して居たので昔は威張つたものであつた、庭内に小松内府重盛手植の松の古跡、平相國の寄進したといふ大風呂釜及び小西行長の

植ゑたと傳ふる白檀樹などがある、此境内に群鳩を飼養して餌を賣つて居るが參詣客その餌を購ふと鈴を振る數知れぬ鳩は此鈴の聲を聽いて忽ち群り來つて客の手にせる餌をついばむ樣中々に可憐でこれは近年此島に一名物を增した著しいものである。

白砂青松の下石燈の駢立するを望見しながら海濱に沿ふて曲折すると綠樹亭々樹下に青芝を敷くの邊り石風呂として古來の名跡がある、この地は街衢に離れた靜閑な境で海に枕み數十株の櫻あり艶陽の頃最も賞すべき地で此邊りを大元浦といふのである、木比屋谷公園といふに次で大元公園に至る、老杉鬱蒼たる間に祠がある之が大元神社で國常立尊、大山祇尊、大國主神を祭り相殿に佐伯鞍職を祀る、大元公園の境域には古幹老樹深鬱として両山の間に鑢立し中程に瀑布があつて松風の瀧といふ又溪流があつて深く高き谷間より來り大石小石を洗ひながら海に注ぐこれを大元川と呼ぶのである、幽邃閑雅で樹間から海水を望み山水の趣致中々に豐富である、外人最も此地を愛賞し園内のみかどホテル四時外客を以て充たされてある、境内に『時雨の櫻』『橘山』『籠の森』などの名勝あり、時鳥を聞くによろしく又蟲の聲賞すべしと

て古來文人雅客の喜ぶ地、こゝの櫻は本島八景の一である。

大元神社の前の石階を登つて進むと道路が平かで石風呂の背後に出る、其左手に丘があつて昔し平相國が多くの石材に法華經の題目を彫つて之を埋め且寶塔を建てゝ戰死者の供養をしたといふので此地を經納山と呼んで居る、又眺望に富んでをるところから公園見晴しともいつて居る、こゝから路を山際に取る、多寶塔に至る、塔を

寶山神社　といつて二層より成り下層三間四方高さ八間餘本尊に藥師如來を安置して居たのを維新の際佛を廢して加藤清正を祀る、大永三年の建設だといふ此建物は特別保護建造物に指定され國家の保護を受くる一つである、この邊も毛利氏陶晴賢を伐ちし時の古戰場である、更に山麓に沿ふて進むと古刹大聖院の舊趾に出る、

大聖院　眞言宗で不動明王を本尊とし彌勒を中尊とし又脇立に弘法大師と毘沙門天を安置して、當寺は元嚴島神社の別當職で世々之を座主と稱した、天正年中仁和寺宮一品法親王嚴島に參籠せられた際前住職良辨の遺弟良政幼年なりしの故に親王座主坊に止住し給ひたるより爾來仁和寺院家の任を世

々にし、山緒深く崇敬また世の常でない、建物は六堂伽藍悉く完備して居たので、下つては去る明治十八年七月、今上天皇陛下初めて此地に行幸ありし時蹕を當院に駐めさせ給ふたのであるが、超えて同二十年十二月十日不幸にも火災に罹り山門悉く烏有に歸し今は唯其礎趾を存するのみである、然るに故小松大將宮殿下御在世の砌深く之を遺憾とせられ堂塔伽藍再建を宣示され爾來道俗共に力を戮せ往時に優る偉觀を起して此名刹靈場をば千古に傳へんとて今も專ら盡力中で遠からず壯觀を復するに至るであらう。

此所にては御山登路(一の鳥居)を横に見ながら順路に下ると瀧町、中江町で清流が横はつて居るこれが御手洗川である、石橋があるこれを筋違橋といふ、こゝを渡ると御本社の背後でこの邊には櫻樹多し又すぐに御衣裳藏及び寶庫がある本社の寶物庫で古來珍器重寶を藏む、この寶庫の建築を畦庫作りといつて奈良の法隆寺にあるものと同一結構で全國社寺の寶庫中最も名の高いものである。

寶物陳列館　本社の背後に當る廣やかな平坦地が御垣ケ原である、こゝにある建物が寶物陳列館で桁行十六間、梁行六間、神社藏するところの刀劍甲

胄書畫經 卷 鏡 玉 樂器の類を陳列し拜觀料一人金四錢を徵し諸人の觀覽に供して居る、此館の前方に日露戰役の際鹵獲した加農砲や敵彈に破碎された軍艦春日の煙筒など我が帝國の武勇を長へに傳ふべく安置されてある、この邊りから商家の街を山手に進むと宿町で產物店軒を連ねて居る、こゝを過ぐると彼の有名な紅葉谷に行くのである。

紅葉谷 は御手洗川の上流で奇石怪岩索綜として岸を綴り溪水清く流れて四時盡きず、岸上の楓樹は秋に至ると千枝爛熳二月の花よりも紅で之が絕勝殿島に冠たりであるが其他春の櫻花夏の避暑何れも優劣はない、紅葉谷の岩惣といふは此園內の旅館である、谷ケ原といふ古來鹿鳴を聽くを以て殿島八景の一とする名所が此奧にある。

紅葉谷を元來し道に返ると御垣ケ原の東側に**三翁神社**がある祭神は佐伯鞍職、所の翁、岩木の翁で別に大巳貴命、平相國を合祀す、こゝから客人社背後の瑞籬に沿ふて行くと荒胡子神社（素盞嗚尊を祭る）文庫、御廐がある、御廐には近頃神馬二頭あり其一は『魁號』といつて第五師團野砲兵第五聯隊將校團の寄附で當島の有志沼田氏幹旋し近頃こゝに献納したのであるが此馬は同聯隊に附

屬して廿七八年役、三十三年事變に從軍し尋で三十七八年戰役にも幾多の戰塲を馳驅して一たびも傷病せしことなく不可思議なる働を爲したる眞に殊功に價する經歷を有して居るので、特にこゝに納められたのである。

戰役中既に『神』と稱せられて居たのである。

千疊閣 こゝに聳えた山を龜居山といつて御笠濱背後の高地の總名である此丘上の壯大なる建物が千疊閣で、太閤豐臣秀吉征韓の時先づ本社に寢して戰勝を祈つたので、凱旋の時之を建造して報賽したものだといふのである、梁行十八間桁行二十五間の大建築物である、初め豐太閤本社に詣で此山上に老大なる樟の木のあるを見て伐つて以て巨船を作り其餘材で此閣を建てたなりとの傳もある、舊時はこゝを大經堂といつて阿彌陀如來を安置して居たが維新後佛を遷して今は豐國神社となつて居る、此山上は海上風濤の景を瞰るに佳にして又御山の翠巒と對し呼べば對へんの趣がある、廿七八年戰役の折出征兵士本社に加護を祈るもの皆悉く此閣に登りて宮島杓子に氏名を署して奉賽するの例を始めてから以來大小の杓子幾千萬となく梁上柱身に釘たれ一種の偉觀を留む、蓋し其の創意は敵を召捕る（飯取）の心に出たものであ

る。

五重塔 千畳閣の隣りに聳え方二間半九輪まで高さ凡そ十丈應永十四年七月の創建と傳ふ、後二百二十年を經て殆んで頽廢せんとしたを天文年度に再建されたるなりと、今は千畳閣も五重塔も共に特別保護建造物として御本社の殿宇同様國庫保護の下にあるのである。

大鳥居 御本社前の海中平沙の上に建つ滿潮の時は舟船白帆を揚げて之を潜るも退潮の際は二三町に及びて一面干潟となり介石を拾ふ事を得るのである、嚴島の宮居も社頭に魏然として天を磨する此大鳥居があればこそ一層の崇高を增すのである、平相國改造して初めて大となり其後屢々再建されたのであるが舊記の存する所に依ると今あるもの再建の第八次に相當するので其以前は知る事を得ぬのである、現在のものは嘉永頃の計畫が漸く明治七年に至つて起工式を擧ぐる事となり其の十月十五日に式を終へ翌八年七月十八日の吉日を卜して落成式を擧げたものであつて之が大けさは左の通りである。

大鳥居 總高凡五丈五尺

本柱 丈圓座下端より元口迄四丈四尺五寸、圓座厚さ一尺六寸徑一尺

五寸三分

下廻り 右(西)三丈三尺三寸、左(東)二丈七尺五寸

大貫 長六丈八寸四分(内両鼻出一丈四尺)幅三尺、厚さ一尺一寸

島木 長六丈八寸四分

笠木 長六丈七尺六分

棟屋 長七丈七尺一寸四分

袖柱 寸負下端より元口迄二丈八尺一寸九分(寸負の高さを加へ總長二丈九尺九寸九分)下廻り一丈八尺五寸

袖貫 柱より柱まで三丈一尺、鼻出三尺七寸五分、上の袖貫と下袖貫との間隔一丈

又之が扁額は竪八尺三寸、横五尺八寸で表裏両面あり共に有栖川二品熾仁親王の御筆なり、表の分は『嚴島神社』、裏の分は『伊都岐島神社』と書かれてある、近古天文十六年改造の時の御額は後奈良天皇の震筆で大内義隆の勸狀が添ふて居る共に今は寶物として神庫に秘藏されてある。

卒塔婆の舊跡 御本社境内鏡の池の内に横はる大石を卒塔婆石といふので

ある、昔し平判官康頼が法勝寺入道俊寛等と共に平氏に罪を獲て鬼界ケ島に流された時都に殘した老母の身の上を思ひ出し故郷戀しさの餘りに千本の卒塔婆を造つて之に左の二首を彫りて流した其の一ッが本社に流れ來てこの石に掛つたのを當時康頼に縁ある僧が拾つて京師に送り法皇の叡覽に供したので法皇その孝養の志を感ませ玉ひ平相國またこれを聞き傳へて神慮のある所と思ひ遂に康頼を赦したといふのである（此事源平盛衰記にしるせり）

思ひやれ暫しと思ふ旅にだも、なほ古さとは戀しきものを

薩摩がた沖の小島に我れありと、親には告げよ八重の汐風

康頼の石燈籠　御本社王殿瑞籬外に一基の石燈籠がある之は康頼の寄附したもので歸郷後神明の加護を感じ奉寄したものと傳ふ、形體甚だ古雅である

御幸松　承安年中後白河天皇臨幸の砌行在所を建て松の御所と稱へさせ給ひし由の言傳へがあつて松は年久しく榮えしも巨木となつて枯死し今は其枯朽した根幹を存して居る、長橋を渡つて西に行く石垣の側に竹圍ひを施して保存されてあるのがこれだ。

尼の洲　この町の市街前面の港を古へは有の浦といひ有の浦の客船を八景

の一に數へて居たが、今の海岸通り一、二町目の邊りを尼の洲と稱へ壽永四年源平壇の浦の戰に二位の尼安德天皇を抱き奉りて入水せしものが、其の屍流れてこゝに漂着したと傳へられてある、これが爲に此地に石燈籠を建て供養の印としたを後海岸の埋立に連れ街區に變更を來し燈籠は今の濱の町水天宮の前に移されたのである。

要害の鼻　濱の町から小浦に通ふ途中の丘上（櫻橋待合所の出でし所）を要害の鼻といふのである、毛利氏陶を討つの時こゝに城壘を築いた古趾である、今伊勢神社この山つゞきにあるが故に一名を宮の尾といふのである。

西行返り　小浦から長濱に越す小山の一部に西行返りといふ古跡がある、其の名の起りといふは西行法師此島に遊びし折この坂で島の女に道を問ひしに女容易に教へざりしかば、西行法師

空蟬の藻ぬけの殼にことゝへば、山路をさへも教へざりけり

と口吟みたるを、女ほゝ笑みて藻脱けの『からか』とこそ讀まるべきものを、既に『からに』と斷定められたるからには教ゆるに由なしとやつたので道の西行返すに言葉なくそのまゝ跡に引返したといふのである。

長濱神社　西行返しを打越へて山を東に下ると曲浦のほとりに小祠がある、これが長濱神社で與津彥神、與津姬神を祭る、これから東を長濱公園と稱へ白砂青松また仙境を作成せるの地、**海水浴場**の設備があつて水淺く危險なく夏時大に賑ふのである。

嚴島尋常高等小學校　此仙境に廣大なる敷地を築きて新築せらる、其構造の完備と地域の清雅なる恐らく他地方に之が類例を見ぬことであらう。

陶晴賢戰死の地　本島七浦胡子第四番目の拜所に青海苔神社といふのがある、此浦より山に入る十三町に高安が原とて陶、毛利元就の爲に攻められ此地に遁れ入りて自殺した舊跡だといふのであるが更に又一說に陶の戰死地は大江浦（西の方にあり）だともいふ。

本島前面の探勝地は長濱にて盡き更に元來し道を裏手に下ると**瀧の尾**とて昔時は丈六の大佛を安置して居た場所がある、今は荒涼たる有樣なれど梅や櫻の古木多く花時には又杖を曳くに足るのである、**荐光寺**、**寶壽院**などの古刹この邊りにあり。

光明院　塔の岡といふは幸町を登りしところ龜居山の連脈を平げて通路とした皇城の總稱であるが、その上に光明院といふ淨土宗の寺がある、京都智恩院末で阿彌陀佛立像を本尊とす寬 永元年の創立で奥州岩城鄕人出家して以八袋中と呼びたるが修學の功を重ね中國九州を遍歷しての歸路に此の地に來りて庵室を結び岡の庵と稱へしに始る、以八上人遷化の後弟子辨西といふ者餘業を繼ぎ翌寬永二年九月に至り初めて堂宇を建築し華降山以八寺光明院と名けたのである、此寺には所藏の重寶佳器少からざるが中に絹本紺地金彩彌陀三尊來迎の圖一幅幷に木造阿彌陀如來立像一軀は**國寶**と治定せられてある、寺後の山上に高く聳ゆる綠松數株ありその並び立てるの樣の相似たるより**鳥居松**と稱へ古來名勝の中に數へらる、この所から山路を谷ケ原に出で更に紅葉谷に通ずるのである。

嚴島町役場　は塔の岡を西に越す小高きところに建てらる。

誓眞井戸　今より百三四十年の前本島竹林寺（今は廢絶す）に誓眞といふ僧があつて佛に事へる傍ら或は工人に彫刻の業を授け又は自ら鋤を取つて道路を修繕するなど諸人の公益に力を致して居たが、就中島人の後來用水に困乏すべきを慮つて布施托鉢に得たる米錢を貯へ之を資として井を掘鑿すること島中

總て七ヶ所今に至つて清水渴きず島人餘慶に浴し傳へて誓眞釣井といつて居る、又今日盛んに製作され全國に供給されて居るところの宮島杓子は全く此誓眞が創意に出たもので島人其の德を慕ひ毎歲舊曆八月六日誓眞祭りといふのを光明院で營んで居る。

御山　御本社の南に聳ゆ一に彌山と書く弘法大師梵閣を此山に營むに當り山勢忽然として峻絕せるを應用して須彌栴に比し經營したるに因みて彌山と呼んだのであるが、元來が神明の鎭座せる靈境だから御山と書くを正しといふものもある、山内には神祠佛閣造營され名勝古跡亦甚だ多い此山上の神佛に奉するを御山詣とて信者は殊に深く崇高の念を拂ふて居る、今順路より之が案内をしやう。御山に登る客は先づ御本社背後の筋違橋を渡つて中江町より瀧町を上らば山路となり石の鳥居がある、之を一の鳥居とて御山の入口だ登りて間もなく地藏堂、大師堂及び祈不動堂を拜すべし、此祈不動といふのは豐太閤征韓の後護身佛を納めたところだと傳へられてある。

瀧宮神社　登ること町餘谿間に渡せる橋を渡りて進むと祠があるこれが瀧宮で御本社祭神の一つ湍津姫命を祭神とし建物は本殿二間二尺四方、拜殿五

間に二間である、此の社の背後に當り高さ十二丈直立せる岩石の高處より落ちくる瀑布の其樣白糸を掛くるに似て居るので白糸の瀧と稱へ夏季には多くの螢が飛び交ふさまの水に映りて美事なり、瀧の宮の螢とて八景の一である、瀧の前に稍平かな岩があるが治承四年に高倉上皇が登臨され此岩上に座まして叡覽あつたといふので此岩を御幸石と呼んで居る。

こゝから上は峻坂足の留めどもなく參詣客は困むを例として居たが數年前伊藤公爵の發起で縉紳を語らひ數千金を投じて御山登路の改築を爲し峻坂は切下げ高きは道を迂回せしめて通ずることゝしたので登山の行程は延長したれど登るには餘程容易くなつたのである、休堂と稱へ數十歩の平坦地に至るとこゝには茶店があつて名物の力餅を賣つて居る、眺望絕佳瞰下に本社宮殿樓閣を望み又背後を顧みると御山の翠巒が我を招くが如き狀があつて行途の勞苦はお茶一吹と共に忘れ去るのである、こゝは御山五丁目公園みはらしともいふが今では七八丁目に相當して居る。

尙進み行くに路から谷向ひに當り大巖石が數十丈の絕壁を露出して居て其狀恰も幕を張つた樣だといふので古來幕岩の名があるが今日では大戰鬪艦

を海から揚げて其舷側を見るのと同じ感じがするのである、兎にも角にも雄大なものだ、休堂から五町餘の所に大なる石の立てるをば力石といふのである、福島左衛門太夫正則登山してこゝまで來ると怪げな山伏に出逢して何か押問答に不可思議があつたので道の正則も靈威を憚つて中途下山したといふ處から一に太夫戻しの石ともいふのである。

更に進めば右手に岐路があるこゝを登ると二三十坪ほどの平地で北方の眺望開豁、前の休堂よりも一入眺めが廣くて島の北端聖崎の勝景をも認めることが出來る、こゝは御山道改修の賜で以前には無かつたのであるが改修に伴ふて此勝地一つを開いたのである、又此邊りに以前には木蔭で見えなかつた無名の瀑布が現出された、これも道路を變改した爲で名けて統監瀑布といつて居る伊藤公に依りて道路が改修されたを紀念する爲である。

老幹怪樹鬱蒼として千古を密語くが如き間を過ぎて天日を仰ぐを得べき塩所に出ると二王門がある、今は廢絶したが昔はこゝに木の鳥居があつた今でも此地を二の鳥居といつて居る。右手に岐路があるが御山の頂上から降りて返路にこゝを取るのが順路である、さて二王門から上が彌山の本山といつて、

昔時両部の際には中々嚴重であつたのである、この途中には水晶石といふ丈餘の巖石をはじめとし奇石怪岩送迎に遑がないのである、道は次第に高く瓜先上りとなる。

水掛地藏　とて道傍にあり岩石の間から清泉の湧き出るのを參詣者掬ふて地藏尊の頭に浴せかけるそれが供養だといふのである、此邊から道が二つに岐れ右手に下り道があつて木の鳥居が立つて居るこれを進めば

御山神社　に詣る山麓から二十町餘りの道程である、神神は御本社と同じく三女神で社は大磐石の上に建てられ岩上周圍の瑞垣二十餘間、この所前は數百尋の絶壁で其底は深い〳〵溪で社傍にたゝづみて谷底を下瞰すと覺えず身の毛も戰慄つ思ひがするのであるが蒼山碧水の景一眸に集るので身は仙化するの感がある、此拜を終へて鬱蒼天空を蔽へる森の間をくゞりて進むと。

求聞持堂　に至る此求聞持堂は十二間に二十五間の建物で最初は弘法大師、次では平相國清盛の營繕であつたが長享元年に將軍足利義尚再建し降つて慶長八年に時の國主福島正則が建替へたものが明治二十一年一月に至つて火災にかゝつて寶藏靈佛と共に燒けたので明治廿七年町民信徒等義捐金を集め

て建立したのである、本尊は虚空藏菩薩で弘法大師平城天皇の大同元年歸朝後當山を開き護摩求聞持の法を修めこの堂を建つ、堂内に爐室があつて大なる湯釜を掛け年中爐火絶えず、この火は大師が修法の際焚たもので爾來今日まで殆んど一千百年不盡不滅のものだとて修法の行者又は一般信徒の歳年中燈を絶たぬのである、之を彌山本堂といふのである。

堂の後に清泉があるが大師修法の際加持水に用ゐたもので之を閼伽井といつて居る、又堂の下方に曼陀羅石といふのがある數丈の大磐石で表面に梵字を書し且別に三世諸佛、天照大神宮、正八幡三千七百餘座の名が刻んである。

堂前には錫杖梅といふ古木があつた之は大師が用ゐた錫杖を立てゝおいたのが生茂つたものと傳へられて居た。

三鬼神社　本堂の上にあり維新前兩部合體の時は御山神社に祭つてあつた追帳鬼神、魔羅鬼神、時眉鬼神を本尊とす、社宇は近年の建築で題額は本堂のと併せて伊藤公爵の筆に成つて居る。

鐘撞堂　三鬼神社を後に廻つて進むと鐘堂がある、治承元年右大將平宗盛の寄附したものでこれを撞けば谺に響きて餘音長く引く。

毘沙門堂　三間四方の建物で水精寺の稱あり本尊は毘沙門天で弘法大師の作、昔時は毎年正月の元日から七日まで供僧修正の法を行ひ六日の夜は結願に當るところから諸方參詣するものが多かつたが今日では其遺例を留めて舊正月六日に神社に年越祭を行ふ際登山するものが多いのである、堂中の額に『寫彌山佳景』と題せるあり、支那抗州武林郡の産で孟子の裔、明末の頃に日本に歸化して武林治庵と名り字を士式といふ此人の筆だと傳へらる（治庵は赤穂の義士武林唯七第四世の祖なり）然るに明治四十年旊六月十七日夜時恰も海上には管絃祭の眞最中堂前の燈火の爲に火災を起し此堂宇全く烏有に歸し憾を遺したのである、但し目下再建中で遠からず落成するであらう。

堂側に岩屋不動といふて大巖石が自然と屋蓋の形をした其内に不動尊を安置したのがある。

この邊りは御山の頂上に屬する區域であるが此頂上の堂宇諸社を拜するを宮廻りと稱へ昔時は伊勢大廟、出雲大社をはじめ春日、熊野、琴平など全國の大社を此山上で遙拜する事になつて居たので崇敬禮拜の儀式も嚴重であつた、今日でも島の敬神家は毎月登山して遺例を行ふて居るのである。

頂上石　その名の如く御山宮廻りの絶頂にて岩の高さ三丈周圍四丈あり岩下に佇みて遠望するに東は江田島の青螺を隔てゝ呉軍港の煙を望み東北は廣島城市の山川を見るべく西は周防の群巒遠見せらるゝのであるが又近くは對岸國道筋の村々の人家は呼べば答へんばかりの趣がある、そして海上には島嶼の泛べるもの舟船の往來ふものなど宛ら名家の筆に成る畫を見るの感がするのである。

頂上石の下の方に龍燈杉といふのがあつた、こゝから海上に出現する龍燈を觀るによいと云ふので此名が附いたのであるが今は此杉は枯朽して跡を留めない、此龍燈といふことは毎年舊正月の元日から月末にかけて晴天の夜に限り島の浦々の海面から火の光がぼか〳〵と浮いて出で山上から望むに初めは點々漁火の如であるが六七燈から十數燈多くは二三十燈に及んで後にこれが一團となつて燃え立つやうに見えるこれを昔時は異靈として敬崇の念を以て迎へたのであつた。

滿干石　頂上から降りかゝると數ある岩石の一つに一箇の穴がある、此穴滿潮の時刻となると水が充滿になり退潮の時には干くので滿干石といふのである、又此近傍に**船石**とて其形が船に似て居るのがある。

大日堂　建物は四間四方で、胎藏界大日如來を本尊とす、弘法大師彌山を開くと同時に修法の道場として建立したもので往古は神護寺といつて居た、この堂の側に目洗藥師とて眼病者の賽する藥師堂安置されてある、これより降路に就けば前の水掛地藏のあたりに來るのでこゝからは一筋路を二王門に出るのである。

奥の院　二王門の下を南に谷底に降ると奥の院に行く、こゝには大師堂(及び籠所)、彌勒堂などの舊跡がある、此邊喬木鬱蒼として天日を遮り深山幽谷の境人をして人間外にあるの思ひを爲さしむのである。

二王門の前西の登口に入る、此區域は道程峻嶮なるそれ丈形勝も雄大である、途中に**三劔窟**といふのがある昔何人か〻三段に折れた劔を納めた塲所と傳へられ岩下に觀音の小堂がある、この邊を**鹿屋谷**といふ。

駒返し　峻嶺に達するに岩石重疊の有樣で一の岩上に馬蹄に似たる跡があるので**龍ケ馬場**ともいふ、駒返しは御山に相對して聳ゆる繪馬ケ岳の絶頂で其西に面する部分が最も險しく數百尺の絶壁一面の巨巖であつて宛ら削りた

てたやうである、此所は弘治元年九月毛利元就が陶晴賢を討ちし時陶の部將弘中參河守隆包及び中務の父子が市街の各地に轉戰して大勢の味方に不利なるを見るに及び部下百餘騎を率ゐて此險を扼し以て毛利氏の大軍に當り、三昼夜の血戰に花々しき最期を遂げた古戰場であるので駒返しの名を得たのであるが之を訛傳して駒ケ林といふて居る。

繪馬岩　繪馬ケ嶽絶壁の西面中央に當り駿馬が後方を顧みて千尋の谷底に向ひ走らんとするが如き黑色の印影を留めて頗る奇觀であるが惜しい事には近きて認むるに道がないのである。

この邊り頂上に達するに御山順路を二王門から西に入るの道の外、二重塔の方面から登ることも出來るのであるが山頂に近くに隨つて路は次第に急となり岩石亦漸く多くなつて左折右往あえぎ〳〵登る、然れど一歩は一歩より四圍の風物新たに觀望頗る宏壯で心神自から愉快を感ずるのである、頂上には大なる鯨の如き二個の大磐石横はり百數十人並び座することが出來る、そして四望眼を遮るものがないので遠山近海周圍の絶勝歴々として指顧の間にあり、之を御山絶頂に比するにこゝの風觀は總じて壯大の趣がある。

岩屋大師　巨岩天を蓋ひ四面皆岩にて圍ひ天然の石室を作し僅に一方に入口あり窟の内は廣さ十數疊敷で直立して歩行するに足る、こゝは弘法大師が護摩の法を修した舊跡で今は大師の靈を祀り全國修法の道者多くはこゝに拜するのであるが一名龍ケ窟といひ又護摩谷の窟ともいふのである。

龍ケ洞　護摩谷を下ること數十間大岩石に洞穴がある、其深さ探るに道なく昔時龍の拔けた穴だと傳へられてある、こゝからは下るばかりの道で十數町にして大元公園に出るのである。

御山神鴉　古來神秘として居る御烏といふは普通のものと異り形細く羽毛に光澤があつて麗かである、社傳によると此鴉は往古大神御鎮座のとき始めて來りしもので其裔が今日に相傳し毎年雌雄一雙を產し陰曆九月廿八日對岸大野村にある大頭神社に至つて親子の別れを爲し親烏は何處へか去り子烏の一雙が御山に殘るので烏廻り御烏喰式の時出でゝ餌を啄む靈鴉である。

烏廻り　嚴島に於ける御山廻り御島廻りとはこの靈妙な神境の雙美である苟くも嚴島に遊ぶもの御山に登らねば未だ以て嚴島を語るに足らず御山の雄大を賞するものも島廻りを爲したる後ならねば猶未だ其絶勝を十分に品評す

る事は出來ないのである、此島には七浦がある浦毎に夫々神社を安置して居るので宮島の七浦七胡子といふのがこれである、そして舟を艤し禮容を整へて七浦を拜し島を一巡するのを御島廻りといふのである。

抑も此御島廻りの儀式は上古大神の此島に鎮まりまするとき佐伯鞍職、所の翁と共に廟地を定めんとて浦々を巡檢するに當り靈鳥に導かれたといふに因んで起つたもので、此の儀式は斯樣である、願主御島廻りのことを社務所に申出ると吉朝を撰んで日を定められ願主等心を戒しめ身を清めて其日の未明に舟を整へて社頭を乘出す、先づ一艘の船には幣を挂けたる榊を立て神官之に乘り管曲を奏しながら第一に進むこれを御師の船といふ、又別に客船があつて幔幕を張り清楚な裝飾を施して願主等これに乘り水主どもは揃ひの樽拍子に祝ひの歌といふのを謠いて御師の船に從ふ、今一つ宿船といふのがあつて願主の宿の主人これに乘つて周旋をする、かやうな順序で船から御山を仰ぎながら先づ長濱神社を岸近く拜し島の東から廻るのである。

●聖崎●　嚴島棧橋から十餘町のところで釜島北東の極端に當る岬角の前數歩の海上に二個の麗しき小島がある、岩上數株の古松蟠まりて恰も畫幅に見え

た蓬萊島に似て居るので蓬萊岩の稱がある、こゝを聖崎とは寔に適當な名を附したものである、昔への刊行にかゝる『嚴島圖繪』(神社所藏板)に『この沖合蓬萊と稱するものあり、三四月の頃風恬に波穩かなる時、此處より浮き出づ、その粧ひ金銀瑠璃を以て砂とし、其上松柏生茂り、或は宮殿樓閣の象ありて其壯嚴たぐへん物なし、光明海上に彩きわたりて次第に消滅す、今も往々これを見る人あり』と見えて居るが世俗之を蓬萊の出現といつて居る、蓋し所謂蜃氣樓の類で稀に見る物理的現象であらう。

●杉の浦●神社●　七浦第一の拜所で杉の浦にあり聖崎から四五町の航程である浦は三町程の洲濱で平原を作し松樹生茂りて洋々たる海波を映じ遙かに佐伯安藝両郡の諸山と相對して居る、社には底津少童命を祭る。此浦の東端海濱から二町程山中に入るところに清泉浦出し晝夜を捨てず、此地海に近けれど鹹氣少しもなく甘味あり、往昔佐伯郡廿日市洞雲寺の金剛和尚此所に座禪した時初めて湧出でたといふので金剛水の稱がある。

●包●ケ浦●　大鳥居から一里十四町位のところなり此浦は毛利氏の陶を討つに當り草津から船を出して此處に押寄せ上陸したところであるが浦の東端海

中に圓形の大石がある其上に小祠があつて鹽土翁を祭る、毛利氏は戰勝後新たに社宇を造營し且社領若干を寄進したさうである、此神社は七浦の外なので島廻りの船は上陸せず行く〳〵海上から遙拜して過ぐるのである。

鷹巣浦神社　第二番目の拜所で底筒男命を祀る、此浦には鷹の爪貝とて鷹の爪に似た貝がある。

腰細浦神社　その次を腰細の浦といつて社には中津少童命を祭る、此邊から本島の南面となるので海洋の眺望も次第に濶くなり潮波漂渺の間に豫州の島影をも望むのである。

青海神社　大鳥居から三里七町を距つ中筒男命を祭る、こゝにては禮拜を終り午飯の式がある、酒飯は極めて質素なもので縱令高貴な人と雖も此式に漏れて贅澤な食事は出來ぬのである、終つて出船すると御師の船には鳥向樂といふを奏して船を先方に進める、此樂は神鴉を招降するのである。

これより前大砂利浦とて御山本堂の直下眞浦に當り一部落を爲せる平原があるが此青海苔浦には中央に清流あり平地あり又入江もある。

簑父崎神社　青海苔浦から十五町にして遠す濱もなければ洲もなく唯樹木

蒼々の下巨巖磊々落々波濤常に荒いのであるがこゝは御島廻の一番大切な拜所で御島喰の式はこゝで擧げるのである、其次第は概要左の通りである。

祠官(御師)船舷に立出で粢(環座を作りて短筒なる三寶か据ゑこれに米の粉に て作りし團子を供へ環座の四隅に白幣を立つ)を取つて海上に浮べ樂を奏するに暫時にして神鴉一雙その樂聲に應じて山上より飛び來り波上に漂ふ粢を啄みて婆父崎神社の鳥居前に運ぶこと三度す、此時船中よりは一同拍手して禮拜を爲すこれを御島喰式といふのである。

右にて本願成就、舟人どもは願主一行に向つて祝言を述べ宿の主人また成功を喜ぶので之を終ると願主側からは水主どもに對し祝儀を與へるのを例とする。多少儀容をも略して祝ひの宴をはじめ行厨を開きて歡談唱和しながら進む。

山白濱神社　第五番目の拜所、大鳥居を距ること四里四町、社には表津少童命を祀る、此浦は本島の正南端で海上に羅列せる大島小島の遠景近狀なかゝに愉快である。

禮を終へて再び船に上れば間もなく浦の西南に斗出せる岬角を廻るのであるが此鼻を草籠崎と味び懸崖海上に直立し又一偉觀を留む、丘上には早咲き

の櫻とて名木がある蕨もこゝには早もの出で名代となつて居る、こゝから西を島の表とするのであるが船は次第に北に向つて廻ぐる。

須屋浦神社　山白濱から一里、一帶の白砂上青松の叢立せる廣濶なる勝域に達すこゝを須屋の浦といふ、社には表筒男命を祭る第六番目の拜所で島廻りの船こゝに着し禮を終れば拜殿に於て餡餅の饗があるこれも儀式の一つである、延長數町に亘る洲濱に沿ふて生立てる松原は廣さ約四千數百坪に達し天光松影倒まに海波に浮び風光の佳麗なること舞子の濱をも凌ぐべく眞に七浦第一等の形勝である、此磯に清泉あり退潮の後岩際より湧出し極めて清冷であるので漁人皆こゝに汲み須屋の清水と稱へて居る。

御床浦神社　須屋から半里島廻り第七の拜所で社は波濤岸を洗ふ岩上に建てられ市杵島姫命を祭る、一同上陸祠前に跪くや御師は恭しく祝詞を奏し無事御島廻りを終りて歸路に着けば一家安全將來多幸なるべきを祈るの意を申す右にて式全く終はる。

此社前の巨巖に彫刻せるが如き龜甲の紋形がある、嚴島神社の御紋章に龜甲を用ゆるはこゝから起つたものと傳へられ、又この地は大古市杵島姫命が

最初に降臨ましませし時の眞床だといふのである。

大江浦　次で大江浦に來る海邊に三間餘りの窟があるが之を貝殼塚と唱へ陶氏滅亡の時殘卒等この地に潛伏し貝を拾ふて餘命を繋いだ古跡なりと、又其側に內侍石といふのがある治承年中德大寺實定卿本社に參詣した時當島の有子の內侍とて芳紀十六琵琶の名手なりしを鍾愛したが其都に歸るに當り有子別れをこゝに惜んだと云ふので此名起る。

鞴踏潟　大江浦の東に鞴踏潟といふ地があるがこゝは平宗盛が彼の御山に奉裝した鐘を鑄造した所なのである。

網の浦　朝に纜を解いた有の浦も曉天に其の明眉を賞へた聖崎も前方に表現し船は早七浦を廻つて元の陸地に近づきつゝあるを覺えながら間もなく上陸地に着く、こゝを網の浦といふのであるが大鳥居から巡り廻つてこゝに來ると六里二十七町の航程となる、古へ寶藏院の本尊阿彌陀如來が此浦で漁夫の網にかゝつたといふ因緣が傳へられてある、願主の一行は御師に導びかれてこゝから濱邊の山路を大元神社に出て參拜の上本社に歸つて又拜式があるそれで目出度御島廻りを終り更に宿に來て祝盃を擧げるのが古例である。

嚴島の八景　古來詩歌文章に其の景致を賞されてあるがこゝには八景の題目のみを記す。

社頭の明燈　大元の櫻花　瀧宮の氷蛍
鏡池の秋月　谷原の鹿鹿　御笠濱暮雪
御山の神鴉　有浦の客船

年中行事　嚴島神社の年中祭禮に二樣あり一は國幣中社の社格に依り官規に基いて施行する者、一は舊例古式に據つて行ふものである左に其次第を示す。

△月並祭　官祭では一月一日を始めとし以下逐月一日之を行ふ△元始祭　一月三日式禮を擧ぐ△孝明天皇祭　一月三十日△新年祭　幣帛神饌音樂の奉供あり期日は豫め定めなけれど二月四日宮内省式部職に於て班幣あり幣帛地方廳に到着したる上奉幣使吉日を卜して祭日を定め參向して奉幣の式を行ふ△紀元節　二月十一日祝式の禮あり△例祭　六月十七日此日奉幣使來りて式を擧ぐること祈年祭に同じ△大祓　六月三十日無水月祓の古式あり△神嘗祭　十月十七日執行伊勢大神宮の遙拜式を擧ぐ△新嘗祭　十一月

廿三日此日亦奉幣の式あり△御大祓　十二月三十日六月末日の大祓と同儀なり△除夜祭　十二月三十一日

以上の十一を以て官祭とし以下掲ぐるところは私祭である。

△神衣祭　一月一日午前第一時子の上刻より始む、先神衣を内陣に奉り次で神酒を奉る終りて神官一同大床に於て神酒を頂き參詣の貴賤男女一同階下に進み同じく神酒を頂戴することを得る△御新年祭　一月一日舞樂振鉾を擧行す此の日を一の祭とし二日を二の祭とす神饌を供し舞樂に萬歳樂、延喜樂を行ふ、又三日を三の祭とす前日同樣にて舞樂には大平樂、狗鉾、御德樂、陵王、納曾利を行ふ△楊枝献上祭　一月四日楊枝を奉る（楊枝は古來當島第一の産物とせるを以て之を奉るの例あり）△斧始祭　同日之を行ふ△地久祭　一月五日御寶祚長久の祈禱を行ふ、此日舞樂に振鉾、甘州、林哥、抜頭、還城樂、長慶子（退出）あり△月並祭　私祭にては十七日を定日とし毎月これを行ふ△年越祭　陰暦正月六日は嚴島の六日年越とて古來遠近に名あり、この日祠前に賽すれば一歳の幸福ありとて參詣するもの夥多しく京阪神より三備防長地方は固より讃豫豊筑等の商工業者萬を以て數ふべく、畫間本社に於て御神事あり

薄暮の頃より參詣者中の商人數知れず社頭に群集して當年出來秋の米麥其他穀物の豫想相場を立つるの古例あり概ね暗合するを常とす△初申祭　陰曆二月初の申の日の祭禮なり△推古天皇祭　四月十八日此日の舞樂に振鉾、萬歳樂、延喜樂、陵王、納曾利を行ふ△桃花祭　陰曆三月十五日薄暮より祭式をはじむ音樂を奏し桃花を献じ舞樂に振舞一曲、曾利古、桃李花萬歳樂、延喜樂、散手、貴德、陵王、納曾利、長慶子（退出）等あり△講社安全靈神祭　五月十四日講中の信徒幣殿に詣でゝ拜禮を爲す△敎會講中靈神祭　五月十五日△講社島巡り　前に同じ△管絃祭　本社一歳の中第一の般賑を極むるはこの管絃祭にて古來關西に冠として其の名全國に高し此祭は陰曆六月十七日にして左にこれが祭儀の梗概を掲ぐ

神輿を乘せ參らする船を管絃船と稱す、新造の船三艘を三列に組合せこれに屋形を設らへ幔幕を張り艫の方には神鏡を懸け又舳の左右に寶劍玉鉾を建て紅の提燈夥多を掲げて裝飾せし中央に神輿を安置するなり、而して神官左右に列座し管絃を吹奏し水主十二人いづれも烏帽子素袍を衣て左右に篝火を焚く、この船をば又御船といふ、外に引船二艘を艤し

て御船を曳かしむ、別に御供船といふものありて御船に擬へたる裝飾を爲し御船の後へに從ふ、祭式は薄暮潮の滿ち來るを待ちて始む、豫て艤裝したる御船は玉の御池なる火燒前を漕出して大鳥居を潜り、夫より順次沖に出でゝ對岸なる外宮地御前神社（同郡地御前村の海邊にあり）の廣前に渡りて神事あり、終りて長濱神社に還幸の上管絃あり、夫より又西の方大元神社に漕ぎ行き管絃を奏し、再び本社に向ひ大鳥居に入り客神社の廣前にて神事あり、次で玉の御池に入りて神輿の船を回すこと三度す、最後に本社廣前に於て又神事あり終りて還幸となる此の祭式は滿潮より子の刻退潮の時に至りて終るものとす。

△延年祭　陰曆七月に之を行ふ延年祭玉取と稱すること天正年間仁和寺御門主任助法親王當島に留錫の時故ありて始まりしもので其の式は福神の像を造りて艤上に安置し四方に松梅櫻などの作り花を立て之を拜殿に釣上げ社僧祈念す俗に御正氣入と稱す、而して其の艤を下ぐるや否や衆人裸體にて福神の御首を採合ひ海中に投ず斯くの如くにして最後にこれを奪ひ得たるもの直に町役所出張所に告げたるを以て式の畢りと爲す、これを得た

る者は其の年の幸福を受くるとて悦び祝ふの舊式あり、此の日これを見んとて近國近郷より來集る男女數を知らず、古へから頗る知名の祭儀であつたが維新後神佛分離の際一旦此の式を廢したりしを其の後に至り玉取りと稱し玉を寶珠形に造りこれを三寶に載きて盤上に乘せ嬲て奪取らしむる事古例の如くす、斯くて奪ひ得たるもの其の旨を報ずれば本社には別に新彫したる神像を神前に於て祈念し授與する事とし且米俵などの賞あり近年に至つて再び頗る盛んに行はる△講社安全祭　十月十四日講中の禮拜あること五月に同じ此の日靈神祭をも行ふなり△講社島巡　これは十月十五日を以て行ふを例とす△菊花祭　陰曆九月十五日其の式は桃花祭の如く薄暮より音樂を奏し菊花を奉り舞樂には振鉾、曾利古、一曲、賀殿、萬歳樂、延喜樂、散手、貴德、陵王、納曾利、長慶子を擧行す△天長節　には振鉾、萬歳樂、延喜樂、陵王、納曾利等の舞樂を奏し神事を行ふ△御鎮座祭　陰曆十一月上の申の日之を行ふ△鎮火祭　十二月三十一日薄暮松明の式あり これ亦重き式例なり。

以上は神社に於ける年中の祭式であるが此の外民間に於ける年中行事は五

節句、盂蘭盆等で諸取引も島内では概ね舊慣を用ゐて居る、就中盆會の期には老幼子女島内の住民概ね出でゝ宮島踊を催ほすの例あり毎夜日暮るゝより初更に迄ぶ頃まで盛んに行はる、又春夏二期に市といふ事あり春は桃花祭の前後にて舊三月十五日より十八日に至る神樂あり之を三月市といふ夏は大祭前後にて舊六月十日より廿五日に及ぶ之を六月市といふのである。

神社の寶物　本社藏する所の寶物は刀劍甲冑弓槍等の武器、古文書、繪畫彫刻物等美術工藝品など府庫に滿ちて一々記すこと容易の業でない、就中古社寺保存法第四條の規定に依つて保存會調査の結果明治三十二年八月一日内務省告示第八十八號を以て國寶と治定せられたもの丈でも餘程種類が多いのである。

物産　嚴島には一歩の田畑無く市人概ね旅客の來り船舶の泊するを待つて生計の資を得るので旅館飲食店多く産物を出す事は多種でない、但し誇るべきは世人に其名を知られて居る宮島細工で各種の竹木器、飾置品、彫刻物、轆轤細工、玩弄物等を造出し市中窖を連ねて店頭盛んに之を商ふて居るが之が職工も數多く且年々精妙な製品が出るやうである、又輸出も近年非常の盛

269
396

況に向つて居る、製作品の外にはミル貝、エタラ貝、石割貝又は雪花漬などがこゝの名物である。

安藝宮島名勝案内記 終

明治四十五年四月一日印刷
明治四十五年六月十五日發行

不許複製

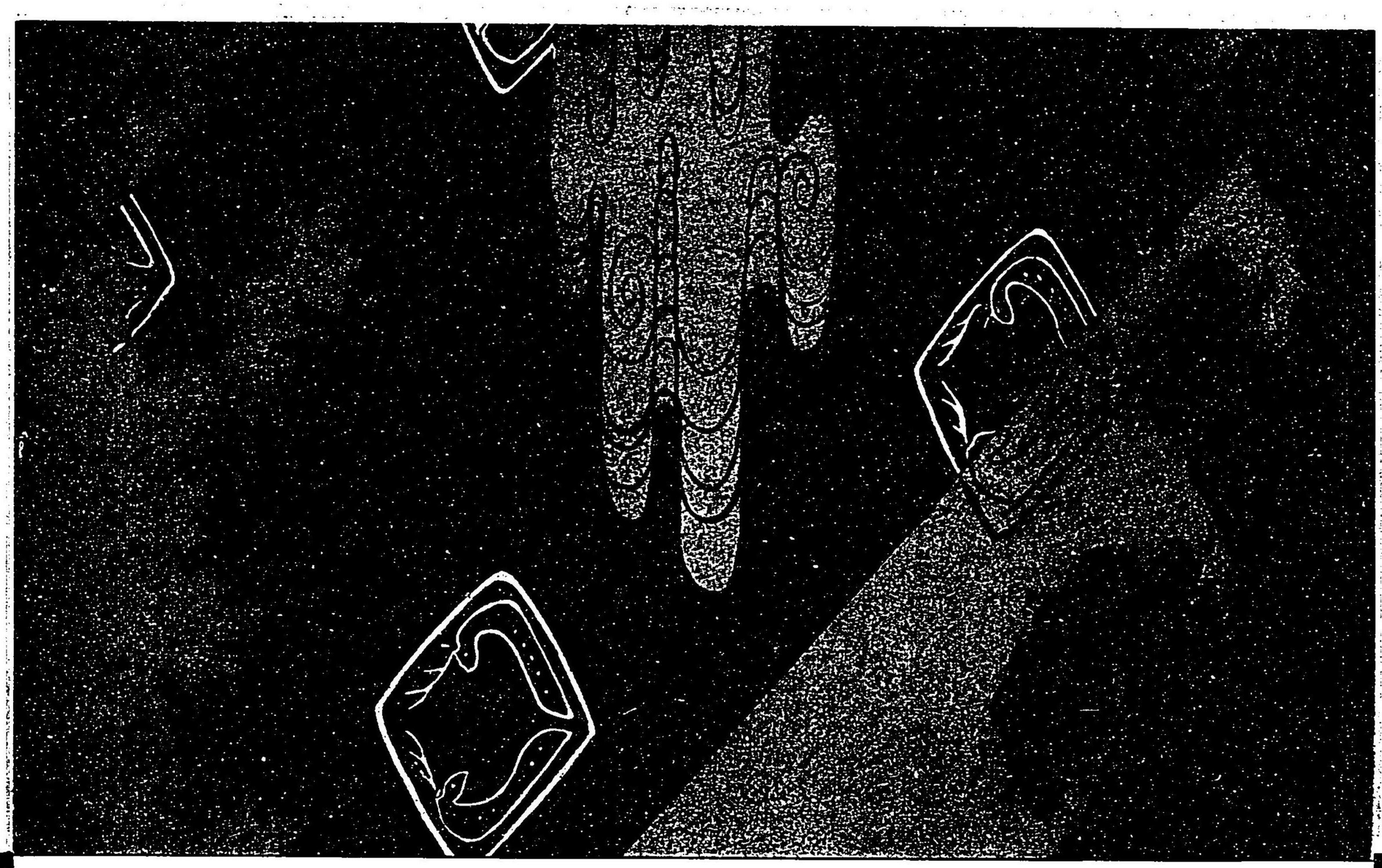
著作者 福島縣福島市大字荒井字宮ノ内五番地士族 山田忠正
東京市日本橋區若松町十五番地 銀花堂

發行者 東京市淺草區左衛門町一番地 野村銀次郎

印刷者 東京市淺草區左衛門町一番地 岩見米三郎

印刷所 岩見活版所

大賣捌所 廣島縣佐伯郡廿日市町字中江 小西保次郎商店



特20
353

安芸宮島 名勝案内記

国立国会図書館

025741-000-1

特20-353

安芸宮島名勝案内記

山田 忠正／著

M45
ADC-3276